様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１５日現在

機関番号：３２４１６
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０５１７
研究課題名（和文）英語多読の長期継続に関する縦断的事例研究

研究課題名（英文）Longitudinal Case Study Research of Long-Term EFL Extensive Reading

研究代表者
神田　みなみ（KANDA MINAMI）
平成国際大学・法学部・教授
研究者番号：２０３２７１２５

研究成果の概要（和文）：
本研究は、大学生の２年以上にわたる英語多読長期継続の縦断的事例研究である。質的分析により、多読を継続することで、読書量、読書レベル、内容に大きな伸びが見られた。学習者自身が伸びを自覚することが動機付けとなり、より読書量が増える傾向があった。ただ、一年間に伸びが全く無かった学生は、継続しても変化は無かった。さらに、学生が適当なレベルで興味を持てる多読用図書を選ぶことに困難を感じていることも判明した。

研究成果の概要（英文）：
This longitudinal case study research primarily focused on the effectiveness of a two- to three-year extensive reading (ER) course as part of an EFL university curriculum. The qualitative analyses revealed that the students who continued ER for more than one year showed notable improvements in their English reading skills, as seen from their reading amounts and reading levels. These students were aware of their advances and that realization served as their motive for continuing ER and increasing their reading amounts. However, one student who did not demonstrate any advances within the first year of his ER, did not improve after continuing ER for an additional year. Moreover, students tend to have difficulty finding books that suit their English reading proficiency and interests.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：英語教育学・応用言語学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教育、多読、質的研究

１．研究開始当初の背景

(1) 多読の広がり

本研究代表者は、酒井・神田(2005)で量（語数と冊数）を重視する「英語 100 万語多読」を提唱するとともに、多読用図書の開拓を進め、段階別英語リーダーや英語話者向けの児童書を紹介するブックガイド（古川・神田他 2005, 2007）を出版した。非常に短く易しい英語絵本から読み始め、大量の冊数や語数を読む 100 万語多読は、近年の多読を積極的に導入する中学・高校、大学の増加に貢献してきた。

(2) 多読の効果と長期継続

多読の効果については、リーディング能力のみならず他の様々な英語スキルへの肯定的効果や学習意欲の向上が示されている(Day & Bamford, 1998; Krashen, 2004)。しかし、逆に多読の効果には限界があるとする研究(Folse, 2004)もある。実際に多読を開始して、期待通りの効果を上げているケースばかりではなく、多読の有効性については様々な議論がある。

ただし、多読の先行研究は、１年以内の多読授業を対象としたものがほとんどであった。英語話者による母国語の飛躍的伸びは、かなりの期間と量の読書が要因であり(Trelease, 2006)ことからも、多読の長期継続の研究が必要であった。

英語多読を実施する大学は増えているが、英語カリキュラム導入にいたるケースは少ない。１年を越える多読の長期継続を縦断的に調査することにより、長期継続を可能とするカリキュラム導入に対する示唆を得ることができる。

(3) 質的事例研究の必要性

研究手法としては、心理学、教育学や社会学等の分野において、少数の事例を詳細に記述し分析する質的事例研究が盛んに行われており、応用言語学分野でも注目されつつある(Duff, 2008)。ただ、長期的縦断研究は少なく、本研究はその点でも新たな知見を得ようとするものである。多読の長期継続に関する縦断的事例研究は、学習者の多読の紆余曲折もたどることで、より適切な多読指導への示唆が得られ、英語多読カリキュラム実施の際の有用性は大きいと思われる。

２．研究の目的

本研究の目的は、多読を２年以上にわたり継続する大学生英語学習者を縦断的に調査することである。具体的には、読書量、英語力、学習意欲などの長期にわたる変化のプロセスとその要因について、少人数を対象とした詳細な記述および分析をする質的事例研究の手法をとる。英語多読をめぐり授業内外で起こる問題点とその解決方法を質的研究の詳細な記述で見いだすことを目指す。

リサーチクエスチョンは新たな知見が出れば調整することとし、大きく以下の４点を焦点とすることとした。

(1) 英語多読を順調に進める要因は何か？
(2) 英語多読継続を困難にする要因は何か？
(3) 多読を長期継続した学生の読書力はどのように伸びるか？　またその要因は何か？
(4) 多読の長期継続の成果は学生により、どのように異なるか？　また差異の要因は何か？

３．研究の方法

(1) 研究協力者

本研究は、平成国際大学で英語多読を必修科目授業で行い、翌年以降に選択科目（半年）で英語多読を継続した学生を対象とした。多読継続期間が２年以上の学生のうち、終了時に読書記録の保存があり、そして本研究への協力同意確認（インフォームドコンセント）を得られた学生数名を対象にしぼった。
研究協力者は英語を専門としない法学部学生であり、結果的に全員が男子学生となった。多読授業を２年以上履修したという点で、自ら多読を継続しようとした学生である。英語力はほぼ同程度（初級～中級）で、多読開始時に Penguin Readers Easystarts（使用語彙レベル 200 語、総語数 900 語程度）を読むのに 15 分以上かかり、読了に困難に感じる学生を対象とした。それよりも極端に英語力の不足している学生、また、最初からこのレベル以上を比較的に楽に読める学生は研究対象から外した。

(2) 英語多読授業

英語多読授業は「多読三原則（酒井・神田, 2005）」を示し、辞書を必要としない短く易しい本から読むことを推奨した。Day & Bamford (1998)の「多読授業 10 原則」にも沿ったものである。また、全ての学生に「レベル０の本（古川・神田他, 2010）」つまり使用語彙レベル 200 語以下、総語数 0-800 語の本を最初に読んでもらった。まずは逐一日本語で翻訳せずに理解すること、スムーズに読む「読みの流暢さ(reading fluency)」をつかむためである。

授業は週１回 90 分、年間 24 回程度であった。授業中 60 分程度、学生が個々に多読を行う時間をとった(Pilgreen, 2000)。教師による多読の仕方の説明、アドバイス、本の推薦などが、必要とされるときに即座にできるという利点がある。また、個別面談の時間を多読時間内に学生ごとにとった。

多読授業は必修英語（１年）の一部、選択英語（半年）の一部にあり、多読を継続する学生は、必修英語の翌年に選択英語を履修したものである。

(3) データ収集

少数の大学生英語学習者の多読のプロセスを長期にわたり縦断的に調査する本研究では、学生の記録を収集し、同時に詳細記述と質的分析を重ねていった。

① 学生側データ

・ 読書記録（日付、本のタイトル、シリーズ、レベル、総語数、感想コメント）
・ 授業の感想（授業ごとに提出）
・ 英語テスト、語彙テスト
・ インタビュー記録

② 教師側データ
・ 授業観察記録
・ 教員と学生との個別面談（授業内外）
・ 授業シラバス
・ 授業日誌（多読用図書、CD の種類）

上記の質的データに加えて、大学生英語学習者の全体的傾向を把握するために、アンケート調査を行った。

③ 多読に関する意識調査
・ 多読への意識
・ （辞書利用を含む）語彙習得ストラテジー調査
・ 多読の継続の要因、中断の要因についての意識調査

これら、アンケートは自由記述で行ったものが中心である。全体の傾向をみるために一部量的分析も行うこととした。

(4) 研究方法

研究内容と方法は大きく分けて３つとなった。第一に、多読を３年間継続した男子学生１名の縦断的調査、第二に、多読初年度と多読２年目の授業履修者を対象とした意識調査、そして第三に多読を２年間継続して異なる経過をたどった典型的な３名の学生の縦断的調査、である。

① ３年間継続した学生（１名）

学期（半年）ごとの読了語数、読了冊数、および一冊平均総語数の変遷をたどることにより、累計読書量と読書記録の内容（本のレベル、総語数と長さ）の関係を分析した。多読量が停滞したとき、そして伸びたときに読んでいた本のシリーズと本人との面談およびインタビューの記述により、その要因を探った。

② 多読に関する意識調査

多読に対する意識、特に、どのようなことが困難だったり、容易だったりするかについての学生意識調査の対象は 64 名であった。読書記録、面談記録、観察などの質的データに加えて、全体的な傾向をはかる目的でアンケート調査も行った。回答は自由記述であり、どのような内容となるか質的分析を行った。結果的に多読初年度と２年目以降の学生に大きな違いが出ることとなった。

さらに多読と辞書使用の関連の全体的傾向を見るために、学生に語彙習得ストラテジーについてのアンケートを行い、一部統計分析を行った。

③ ２年間継続した学生（３名）

多読を継続する学生はある程度の伸びの自覚がある可能性が高い。成功例だけではなく所謂失敗例も見るために、２年間多読を継続した学生の中から最初の一学期の読書量と読書レベルがほぼ等しい３名を選び、詳細に記述分析を行った。３名は、１年目後半に大きく伸びが見られた後に停滞した学生、２年目後半になってから飛躍的伸びがあった学生、２年間に変化や伸びが無かった学生、という異なった多読の軌跡をたどっていった者である。３名の飛躍的伸び、あるいは停滞、進歩の無さの要因を記述から解明する。

４．研究成果

(1) 多読３年間継続

① 多読１年目―秋学期の伸び

研究協力者の大学生は、１年目は英語必修科目で多読を始め、２年目は自主的に図書館や教師から本を借りながら継続し、３年目に選択科目で英語多読授業を履修した。非常に易しく短い絵本シリーズ（Oxford Reading Tree など総語数 10-400 語程度の本）から英語多読を始め、秋学期に今まで困難を感じていた 1,000 語程度の本を読めるようになった。

これがきっかけとなり秋学期は積極的に図書館で多読用図書を借りて、レベル２(使用語彙 400-600 語、総語数 2,000-7,000 語)の本を中心に読み、一年の後半で多読の成果を上げていた。

② 多読２年目―停滞

しかし、自主的に多読を継続した２年目は停滞が見られ、読書量、読書レベルも減少し続けた。要因としては、クラブ活動等で多読をする時間を定期的に確保することが難しかったこと、好みと英語リーディング力にあった多読用図書シリーズを選べなかったこと、教師のアドバイスも数ヶ月に一度程度のものだったことがあげられる。この期間に読んだ本は再び初年度の前半に読んでいたレベルが中心になった。

③ 多読３年目―飛躍的な向上

この後、３年目に再び多読を行う選択英語科目を履修した。多読時間を確保でき、また多読開始早々の学生にアドバイスも行い、多読授業は学生にとって励みになったようである。そして、課外でも空いた時間には英語の本を読むようになり、３年目の夏休みには総語数 6,000-8,000 語の本を一日に数冊読むこともあった。夢中になって読める本との出会いも多読に弾みをつけたと思われる。最終的には３年目の秋学期で、本人の目標であった 100 万語を越えて 1,038,676 語（481 冊）を読了した（図１）。

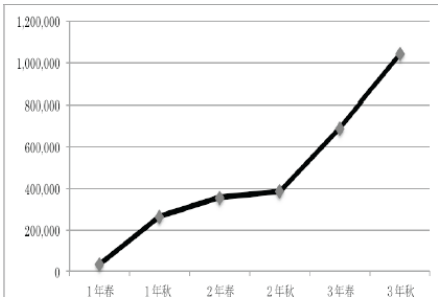

図１　３年間（６学期）の累積読了語数

④ 多読の長期継続の問題点とその解決

最初は英語多読を困難に感じる学生でも、長期継続することでリーディング能力を伸ばして、読書量を飛躍的に増加することができることが分かった。また一時的な停滞があっても継続する意義があった。ただ、長期継続をするためには (a) 多読時間の確保（授業の設定）、(b) 適切な本選び（教師のアドバイス、多読環境）が大切になる。

(2) 多読に関する意識調査

① 多読の難しさ

非常に易しく短い英語図書から開始する多読は、読みの流暢さを獲得するためであるが、それでも学生が困難を感じることはある。学生の読書記録、週ごとの感想、面談やインタビュー内容に加えて、自由記述により、どのようなことを難しく感じるかを問うアンケートを実施した。その結果、大きく分けて、５つのカテゴリーが要因として示された。

(a) 本の長さ

学生が読書記録手帳に記入していたこともあり、本の総語数を意識した意見があった。特に多読当初は文章が読み易くても、長い本を敬遠するケースが多かった。

(b) 語彙

語彙レベル、単語の難しさをあげる学生も多かった。分からない単語が続けて出てくると読みに困難を感じるのは当然である。イラストの助けがあり、非常に短い本であっても、英語母語話者向けの絵本を難しいとする学生もいた。

(c) イラスト

イラストや挿絵が無い本を避ける傾向が顕著であった。イラストが多ければ、短くて易しい本が多いこともある。また、挿絵が数ページごとにあることも、内容や理解を確認できるので助けになると、かなりレベルが上がった学生も報告していた。

(d) ジャンル

特に多読を継続した学生からであったが、好みのジャンルでないと読みにくいという意見が多かった。ある種のジャンルは嫌いという場合もあった。

(e) 背景知識

英語は理解できても、文化的・歴史的・地理的な背景知識が無い本は読みにくく、断念することがあった。本の途中で途方にくれることが多く、内容を捉えられないことを本人は自分の英語力のせいと考えるようだった。

他には「意外性のあるエンディング」「会話文の少ない本」が難しく、読みにくいとする意見もあった。

以上、学生が感じる多読の難しさの最大の要因は、本選びであった。多読用図書を用意するだけではなく、本の選択について、教師や経験者のアドバイスが重要である。さらに、多読開始して１年目の学生は本の好みを言うことが少なく、同時に難しさについても説明できないことが多かった。学生ごとに読み易い本、好みのジャンルを探すことを、教師がサポートすることが求められる。

② 辞書使用と語彙習得ストラテジー

多読三原則および多読授業 10 原則は多読の最中の辞書の使用を制限している。学生は語彙を習得するために様々なストラテジーを用いるが、辞書の使用はどれくらい用いているかを、アンケート調査を行った。その結果、辞書の使用は他の語彙習得ストラテジーとは相関はなく、また英語力にも影響していなかった。多読の際の辞書使用の是非については更なる検証が必要であるが、辞書の使用が必ずしも効果的に行われていない可能性を示唆している。

(3) 多読２年間継続の軌跡

３名の学生 A, B, C についての多読２年間の継続の軌跡を比較した。３名とも最初の一学期に読んだ本のレベル、語数はほとんど同じで、レベル０の本が中心で、レベル１は困難に感じており、当初の英語リーディング能力はほぼ等しいと言えた。最初の一学期に読んだ冊数も語数も多いものではなかった。本研究の対象者はごく平均的な英語学習者であり、特別な学生ではない点で、多読の長期継続による成果は、他の多くの日本人大学生にも一般化できると考える。

① 読了冊数の変化

冊数については、３名とも学期ごとの読了冊数はほぼ一定であり、２年間継続することで、順調に増えていた（図２）。

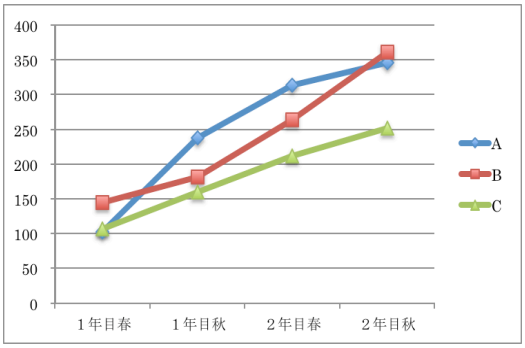

図２　学期ごとの読了冊数

ただし、冊数は以下の語数等の指標や多読読書記録手帳等の質的データに見られた、多読の学生ごとの読書量や読書レベルの違いを反映していなかった。読了した本の冊数は多読指導上の指針としては適切ではないと言えよう。

② 読了語数の変化

冊数では違いがほとんど無かった３名であったが、学期ごとに読了した語数（図３）を見ると、A は１年目秋学期に伸びたあと停

滞し、B は２年目秋学期に飛躍的に伸び、C は２年間４学期にほとんど変化も伸びも無く、当初の低いレベルのままであった。

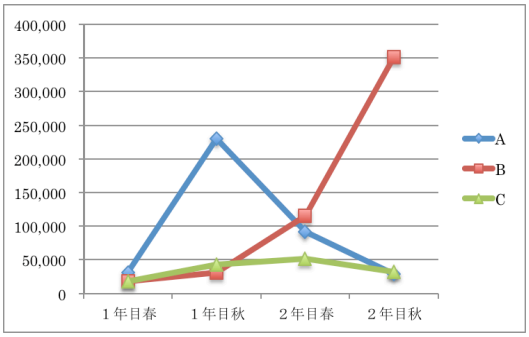

図３　学期ごとの読了語数

多読授業は全ての学生に非常に短く易しい絵本を最初に導入して始めたが、一部の英語力が高い学生は冊数もレベルも高い本を他の学生より早く読み始める。学生 A, B, C はその点でクラス内ではごく平均的であった。特に学生 B は一年目の読了語数が学生 A 同様に 10 万語にははるか届かなかった。しかし、学生 B はその後、大きく伸びて２年目の秋学期だけで 35 万語を読了した。多読を長期継続することで、読書量を大きく伸ばし、成果もあげることが出来ることがわかる。多読の長期継続の効果は大きいと言える。

③ １冊あたりの平均語数の変化

学期ごとの読了語数の伸びは、学生が読む本のレベルが高くなり、より難しく、より長い本を読んだことを示している。学生には読みの流暢さを取り戻すために、折にふれて、短い絵本も読むことを勧めた。そのために、必ずしも平均的に読んでいる本を反映しないが、個々の学生については、学期ごとの１冊あたりの平均語数（読了語数÷読了冊数）は、学生の読んでいる本の長さの変化を表している。一冊あたりの平均語数の変化は、各学期の読了語数とほぼ同じで、より読書量が増えるのは、より長い本を読めるようになったことを示している（図４）。

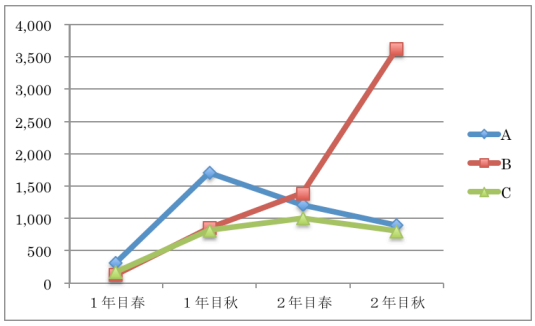

図４　１冊あたりの平均語数

特に、学生 B については２年目の秋学期に顕著に長い本を読んでいた。多読開始時には想像し得なかった成果である。学生 B の読書記録手帳からも英語リーディング能力の顕著な伸びは示された。２年目の秋学期に主に読んでいたのはグレイデッドリーダーズの Macmillan Readers Elementary（使用語彙 1,100 語、総語数 12,000 語程度）であり、多読開始当初で 1,000 語程度の本を長く難しく感じていた頃と比較して、大きな成果を上げた。

逆に学生 C は全く伸びが無く、短く易しい絵本をただひたすら読み続ける２年間であった。学生 A については１年目の春学期の成果が、２年目で読了語数の減少とともに読んでいた本のレベルが下がっている。ただし、この学生はもう一年継続することで、再び英語リーディング力を戻し、さらに向上させた。

④ 多読の長期継続での伸び

２年間継続して成果をあげた学生 A,B と全く変化の無かった学生 C の違いは、小さな成功体験が一年以内に得られたかの差と思われる。学生 A は秋学期の最初に 1,000 語程度の本を読めるようになったことを報告しており、学生 B は一年目の授業の最後の日に 2,000 語程度の本を夢中で読む経験をした。このような成功体験があり、２名はより積極的に多読を行うようになり、後の伸びに繋がっている。逆に学生 C にはそのような報告は無かった。多読の長期継続には小さな伸びを早くに実感させることが大切であろう。

さらに、夢中になった本との出会いも大きい。学生 A も B もとても楽しめる本を報告しており、２年目になると好きなタイプの本、そうでない本を明確に語るようになった。学生 C は聞いてみても、特に好きな本をあげることは無かった。

改めて、多読の長期継続の成果を上げるためには、多読用図書の選択が重要であろう。

(4) まとめと今後の課題

本研究は対象者を少数にしぼり、多読の長期継続の読書量のデータを参考にしつつ、観察記録、読書記録手帳等の質的分析を試みたものである。多読の２年以上の長期継続により、１年の授業では得られないほどの極めて大きな伸びが得られることが分かった。ただし、伸びが無い学生もあった。大きな成果につなげるためには、１年以内に学生自身が少しでも成果を実感し、動機付けとすることが重要である。また、多読の成果を左右する多読用図書の選択は一般に思われている以上に学生が困難に感じていることも分かった。教師のサポートは極めて重要であり、特に個別指導が必要な多読授業では、学生のレベル、多読の経験によってきめ細かい指導が必要であろう。

本研究は多読指導に有用な示唆が得られたが、今後は、質的分析に加えて、研究対象者を広げた量的分析も行って、比較検討を進めることが望まれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① Kanda, M. (2011). Contrasting reading trajectories of long-term extensive reading. *Journal of Heisei International University, 15,* 1-15. 査読無
② Kanda, M. (2011). The significance of word count in long-term extensive reading. *Language, Culture, and Society* (FLTRC, Gakushuin University)*, 9,* 127-142. 査読無
③ Kanda, M. (2011). Construction and validation of scales to measure vocabulary learning strategies. *Journal of Heisei International University, 15,* 17-43. 査読無
④ Kanda, M. (2010). Japanese university EFL learners' vocabulary learning strategies. *Journal of Heisei International University, 14,* 1-22. 査読無
⑤ 神田みなみ (2009). 英語多読の長期継続—大学生３年間のケーススタディ—『異文化研究』第６号、123-148. 査読有
⑥ Kanda, M. (2009). The pleasures and pains of extensive reading. In A. Stoke (Ed.), *PAC7 at JALT2008: Shared Identities (JALT2008 Proceedings)* (pp.1201-1211). Tokyo: JALT. 査読有
⑦ 神田みなみ (2009). 多量のインプットを可能にする多読・多聴のすすめ『英語教育』第 57 号, 第 12 巻, 14-16.（大修館書店）査読無
⑧ Kanda, M. (2009). A student's three years of extensive reading: A case study. *Journal of Heisei International University, 13,* 15-31. 査読無
⑨ Kanda, M. (2009). Pilot Study 2: Long-term effects of ER on English reading ability: A case study. *Language, Culture, and Society* (FLTRC, Gakushuin University)*, 7,* 97-105. 査読無

〔学会発表〕（計７件）

① 神田みなみ (2010.11.6).「英語多読の長期継続：効果と問題点」国際異文化学会 第 12 回年次大会（東京・首都大学東京・秋葉原サテライドキャンパス）
② Kanda, M. (2009.8.22). Long-term effects of extensive reading. 日本多読学会年次大会（愛知県・豊田高専）
③ Kanda, M. (2009.3.23). Reading a large amount without a dictionary: A longitudinal case study of Japanese EFL learners. The 2009 Conference of the American Association for Applied Linguistics (AAAL).（アメリカ合衆国コロラド州デンバー）
④ Kanda, M. (2008.11.3). The pleasures and pains of extensive reading. The 34th Japan Association for Language Teaching (JALT) International Conference.（東京・国立オリンピック記念青少年総合センター）
⑤ 神田みなみ・魚住香子 (2008.8.17).「多読における評価—形成的評価—」日本多読学会年次大会・多読教育ワークショップ（東京・SEG）
⑥ 神田みなみ (2008.8.9).「100 万語多読—英語多読の長期継続」（課題研究フォーラム「多読を科学する：第二言語としての英語の学習における効用」（門田修平他））（関西英語教育学会招待企画）第 34 回全国英語教育学会東京研究会発表予稿集 (pp.244-245).（東京・昭和女子大学）
⑦ Kanda, M., Takase, A., Ueda, A., Uozumi, K., & Yamamoto, A. (2008.7.5). Formative assessment in extensive reading. The Japan Association for Language Teaching, College and University Educators SIG (JALT CUE) Conference（大阪・近畿大学）

〔図書〕（計１件）

① 古川昭夫・神田みなみ（編著）、黛道子・佐藤まりあ・西澤一・宮下いづみ・畑中貴美（著）(2010).『英語多読完全ブックガイド—めざせ！1000 万語（改訂第３版）』東京：コスモピア 512 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
神田　みなみ（KANDA MINAMI）
平成国際大学・法学部・教授
研究者番号：２０３２７１２５

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：